

「大動脈疾患に対する CT 検査が果たす役割」

札幌医科大学附属病院 小倉 圭史

社会の高齢化とともに大動脈疾患も増加し、大動脈瘤のみならず大動脈解離など身近な疾患になりつつある。その中で、本邦は高いCT検査普及率のもと、大動脈疾患を診断できる施設、機会が多く、救急搬送を含めた診療体制の整備によりさらなる治療成績の向上が期待されている。そして、その診療体制には診療放射線技師の関わりが期待されている。

大動脈疾患に対する治療は、治療全体に占めるステントグラフト内挿術(TEVAR/EVAR)の割合が増加傾向にあり、また弓部大動脈瘤や胸腹部大動脈瘤の一部においても、分枝灌流に対する対策を施した新たな手技が導入されるようになってきた。そのため、外科的治療および血管内治療の十分な適応判断が必要である。大動脈解離については、出血性合併症のほかに、malperfusion(分枝灌流障害)が予後および治療成績に大きく影響するため画像診断による評価が重要である。

CT 検査は、大動脈疾患診療に対して、術前、術後評価、フォローアップ、さらに血管内治療後エンドリーク評価など様々なシチュエーションで利用される重要な役割を担うツールである。また、近年ではCTデータを用いた3Dプリンターモデルによる手術シミュレーションが外科医より求められるようになってきた。

非常に有効性の高い検査であるものの、これらの情報を得るためには造影CTが必須であり、造影剤腎症やアナフィラキシーなどリスクを伴う検査である。そのため、安全な環境作りも我々は担う必要がある。

本セミナーでは、大動脈疾患の的確な診療・治療へ繋げるため、CT検査が果たす役割、および安全に造影CT検査を行う心構えについて紹介する。